

【教育・啓蒙著作賞】

著者：池田千恵子

書名：歴史的建造物の再生とツーリズムジェントリフィケーション

出版社 古今書院

出版年月 2025 年 3 月

本書は、産業の衰退や過疎化に直面する地域の再生という課題を背景に、宿泊施設や来訪者を意識した飲食店など観光産業に関わる遊休不動産のリノベーションを通じた地域再生の過程を分析するものである。観光需要の高まりに伴う地価上昇や商業機能の転換が在来住民の「居場所」を奪う事態をツーリズムジェントリフィケーションとして問題提起し、観光を利用した持続可能な地域再生のあり方を論じている。とくに地理学的視点に依拠しつつ、町家や茶屋街、温泉地や市場など多様な空間を対象に、観光を契機とした地域変容を実証的に明らかにしている点に本書の特徴があるといえるだろう。

本書の第一の貢献は、日本におけるツーリズムジェントリフィケーションの実態を具体的事例に即して描出した点にある。さらに、その対応策として提示される持続可能なリノベーションまちづくりのあり方について、日本で唯一アルベルゴ・ディフーズ協会の認証を受けた岡山県矢掛町という成功事例と、その試みが頓挫した長野県小諸市の事例を併せて分析することで、観光を活用した地域再生の成立条件と困難を立体的に提示することに成功している。加えて、アルベルゴ・ディフーズの認証基準等を参照しながら「事業主の顔が見える範囲は約 200m」といった空間スケールに基づくネットワーク分析は、観光の影響範囲を具体的に把握する枠組みを提示しており、これらの地理学的視覚は観光研究の分析枠組みの拡張に資する。

他方で、地域に対して好意的に関与する外部者であっても、結果として在来の住民にとっては「居場所」を奪うジェントリファイアとなりうるという構造的な問題も示唆されている。それについて本書では、不動産所有者と新規流入者の間に立ち、既存物件の有効活用を積極的にマネジメントする「家守」の役割などに着目し、地域側が主体的に域外資本や新規流入者を選別し関与することの重要性が論じられるが、在来の地域住民の主体性と観光客も含めた外部との相互作用や重層性についてはより精緻に捉える余地が残されており、今後の研究に期待されるところである。

以上を踏まえると、本書はツーリズムジェントリフィケーションとリノベーションまちづくりを軸に、観光を契機とした地域変容を構造的に解明し、観光研究に対して重要な分析視角を提示する研究として位置づけられる。とりわけ「居場所」をめぐる地域変容を空間的に議論する問題提起は今後の観光研究への新たな刺激となるだろう。以上により、本書は観光学術学会・教育啓蒙著作賞に値する成果として評価できる。